

『特集』  
震災に負けない

## 閉上ゆりあけに



# 再び笹かまぼこの灯火を

大学時代に知り合った夫・圭亮さんとともに笹かまぼこ製造会社「株式会社ささま」を営んでいる佐々木靖子さん（阿南市新野町出身・58歳）。先代から受け継いだ伝統の味を守り続けること30年、たくさんの人々に愛される会社へと成長を遂げた。その象徴ともいえる3つの工場は、大好きな閉上ゆりあけのまちとともに津波にかき消されてしまう。できることなら戻りたい…。止まったままの心の時計を少しずつ押し進めてくれたのは、たくさんの人々の励みだった。



平和な日常がまたたく間に崩れ去った3月11日の出来事―。

東日本大震災は東北の地に癒しがたい傷を刻み込んだ。家族や友人を失い、家や財産を押し流され、まぢの営みをも奪い去られた人々の苦しみは、想像を絶する。

東北の空の玄関口・仙台空港を抱える宮城県名取市では、海岸から約6キの所まで津波が到達した。死者911人、行方不明者80人（8月15日現在…名取市調べ）。その殆どが沿岸部地域に集中し、なかでも閉上ゆりあけ町区は2割以上の住民が亡くなるという極めて甚大な被害を受けた。

閉上は、かつて江戸藩政時代より伊達家直轄の漁港として栄えた港町。宮城県の笹かまぼこ発祥の地としても知られるこのまちで、靖子さんは被災した。3つのかまぼこ工場や店

舗、そして自宅までもが。

巨大津波から4カ月、深い悲しみに耐え、再起への一步を踏み出した靖子さんの軌跡を追った。

## 被災地 閉上に立つ

夏が急ぎ足でやってくるのがわかるほど、例年より暑く感じられた6月17日、被災地、名取市を訪れた。仙台市から南へ電車で約15分、駅の南東部には臨空タウンが広がり、西の高館山や五社山が連なるなだらかな丘陵地には、東北最大を誇る雷神山古墳を抱え、のどかな園地帯が広がる風光明媚なまち並みに、ここが被災地であることを忘れる。しかし、そんな気分も沿岸部に近づくとつれ一変する。海岸線の松並木は津波でなぎ倒され、閉上の大部

分はがれきの撤去が進み、荒涼とした風景が広がる。日和山ひよりやまという小高い丘からまちを一望したとき、理不尽な惨禍に憤りを覚えた。

「閉上のまちを見て帰ってくたさい」と案内してくれた靖子さん。現地に着くと言葉少なく表情を曇らせた。それでも、「徳島からは遠かったでしょう」と明るく振る舞ってくれるのが、かえってつらく思えた。

## また帰れる

## 誰もがそう思っていたから

あの日、地元の中学校では卒業式が行われ、まぢは新しい春の訪れを待ちわびる子どもたちの笑顔であふれていた。

穏やかな昼下がり、突然、立っていられないほどの激しい揺れに見舞

われる。それは、靖子さんが経験したことのない事態の始まりだった。

「この揺れは尋常じゃない」本店にいた靖子さんは、すぐさま車に乗り、会長宅や本社工場に駆けつけた。地震でまぢは停電し、防災無線が避難を呼びかけることは一度もなかった。しかし、偶然にも車のテレビで津波の情報を知ることができた。会長の圭司さんと母・あつさんが避難したのを確認し、本社の事務所地震の後片付けをしていた夫・圭亮さんを急ぎ立てた。「社長と避難したのは、午後3時35分過ぎだったのではないかと思えます」地震発生からすでに50分が経過していた。

午後3時51分―。想像をはるかに超える津波が、轟音とともに波しぶきを立てながら名取川を逆流していく。折り重なるように押し寄せた津

波は、松林をなぎ倒し平野部の奥深くまで流れ込んだ。慌てて避難する人々、行き場を失い右往左往する車、10層を超える津波は人々に逃げるいとまを与えなかった。命からがら逃げ延びた人々は口を揃えてこう悔やんだ。「過去の経験が邪魔した」と。

市街地までおよそ10分の道のりが4時間以上もかかったと靖子さん。自分の車に、あと200層のところまで津波が迫っていたことを後から知り、背筋が寒くなった。思えば一つ一つの行動に生死を分ける選択肢があった。いろんな偶然が重なり助かった命。ただ、愛猫（みみちゃん）を連れて来られなかったことに胸を痛めた。地震におびえ、いくら呼んでも降りて来ない。「ここなら何とか助かるだろう。そのまま2階でおとなしくしていてね」あの言葉が最後になるとは…。「また帰れる」家族の誰もがそう思っていたから。

## 惜別

震災後、初めて見る閑上の光景に言葉を失う。自宅付近はがれきで埋もれ、建っていた場所がようやくわかるほどだった。工場は原形をとどめず、多額の費用を投じた製造設備や原料・資材はすべて流失していた。「まだ志半ば。たった一日にしてすべてが終ってしまうのか」。もつていきような悲しみと怒りが込



震災前に売り出した  
“ホワイトデーかまぼこ”

み上げてきた。「工場もなくなっただけで、これで終わりか？」圭亮さんは社員を集め、苦渋の解雇を言い渡した。悲しみはこれだけで終わらなかつた。

「いつも笑顔でみんなのことを考えてくれていた頼りがいのあるK工場長は、社長と私の一番の相談相手でした。手先が器用で新人さんの面倒をよくみてくれていたSさん、ホワイトデーかまぼこ”をその日の午前中に造っていたTちゃん。いつも女工場長になりたいとがんばっていました。次は母の日かまぼこを企画しようねと話していたところでした」

避難したはずの3人の社員に連絡がとれないことがわかったのは、震災後、間もなくして。Tちゃんは、会長夫婦をより安全な中学校にと誘導してくれたあと、人を待つからとその場にどまり津波にのみ込まれ

た。「少し苦しそうな顔でしたが、きれいでした」心を引き裂かれる思いで最期を見とつた靖子さん。あの日から、心の時計は止まったまま…。震災からちょうど100日目の6月18日、名取市文化会館で合同慰霊祭が営まれた。「お父さん、天国で毎日忙しくしていますか。お父さんがいなくなった日々が悲しくてなりません」大好きだった閑上のまちでともに暮らした平塚さんの遺族の言葉に、会場は悲しみに包まれた。

「閑上の海で大津波を背にして、親しかった、たぐさんの、たぐさんの方々が手をつなぎ、私たちを必死になんて守ってくれた光景が目に浮かび、涙が止まりませんでした」

靖子さんは祭壇に向かい、静かに故人をしのんだ。



合同慰霊祭で献花をする靖子さん

やさしい言葉をかけられると涙が止まらないんです

震災後、安否を気遣うメールや商品の注文が相次いだ。「メールなんか見れる状態ではなかったし、どう返事していいのかわからなくて」心の整理がつかないでいる靖子さんに「届ける商品はないけれど、現状を伝えるだけでもお客様に安心してもらえないのではないだろうか」と圭亮さんはアドバイスした。友人から借りたパソコンに向かう靖子さん。赤裸々にその思いをつづった。

「4月3日、何かからお話ししたらいいのでしょうか？」以前のような笑顔はなかった。しかし、靖子さんのブログの再開は、閑上復興の希望の光として多くの人の反響を呼んだ。全国から寄せられる励ましの声に後押しされるかのように、靖子さんの心の時計が少しずつ動き始めていくのが読み取れた。

このブログを遠く離れた徳島から見守っている人がいる。靖子さんの父・南谷隆夫さんと母・治子さん（阿南市新野町）。「こちらから電話をかける余裕がなくなるから、こうしてブログを見て靖子のことを見守っています。お互い病気を抱えているので、すぐに駆けつけられなくて…。」と思いは複雑だ。「はじめのころは、ただ、ただ、泣くだけで…。最近になって、ようやく心に余裕が



できてきたのか、声に笑顔が戻って  
きました」。隆夫さんは続けた。「生  
きとつたら何とかなる。何より堯が  
無事でよかった。堯に、もしものこ  
とがあつたら、お前は生きていけな  
んだぞ」と電話越しに背中を叩いた。  
そういえば、堯さんは15年目にし  
て授かった子。靖子さんにとっては  
かけがえのない一人息子だった。  
京都の大学を卒業後、間もなくし  
て東北の地に嫁いだこと、孫の顔を  
なかなか見せてあげられなかったこ  
と、それに今回の被災……。思えば老  
いる父母に心配させてばかりだと自  
分を責めた。「やさしい言葉をかけ  
られると涙が止まらないんです」受  
話器の向こうから伝わる父のやさし  
さに、靖子さんはあふれる感情を抑  
えることができなかった。

## 再起

「復興しな  
いとだめにな  
るぞ」宮城県  
石巻市と同じ  
水産加工業を  
営む同級生の  
言葉に勇気づ  
けられた圭亮  
さん。「どうなるか全然わからない  
が、やるしかない」と自分を奮い立  
たせた。「何もしないでいてはだめ  
だ。いつになるかわからないが、工  
場を再建できたなら全員に声を掛ける  
それまで待っていてほしい」と従業  
員に伝え直し、一度はあきらめた会  
社再建への道を歩み始めた。



植松の仮事務所から再起をめざす  
社長・圭亮さん。

駅から少し離れた植松というところ  
に仮事務所を構えた。机の上は再  
建をめざす書類であふれかえった。  
自らも被災者でありながら、水産加  
工組合の再興にも精力的に動く。  
唯一、被災を免れた名取店を改修  
して事業を再開させる。その先には、  
新工場建設も視野に入っている。店  
内に新設された工房では、工場跡か  
ら拾い集めた金串が、震災前の輝き  
を放っていた。「会社再建の礎にな  
ってほしい」と期待を寄せる従業員  
も、「以前は自分のために、今は会  
社のために働くという気持ちが強  
くなりました」と、再び働ける喜びを  
かみしめた。

## 母さんの人生、波乱万丈だね

この3カ月余り、靖子さんの心は揺  
れ動いた。  
会社を創業し始めた頃は、なかなか  
商品を取り扱ってもらえず苦勞も多か  
った。それでも多くの方に支えられ今  
日までやってこれた。しかし、津波で  
すべてを失い裸同然となつてしまった  
今、わが子のために負の財産をこれ  
以上増やしたくない、という思いを強  
くした。ゼロというよりもマイナスか  
らのスタートに、この選択で本当にい  
いのだろうかと思ひ悩んだ。圭亮さん  
とも意見がぶつかった。でも、何もし  
ないでいることほどつらいことはない。  
そう思うと自然に気持ちが前向きにな  
れた。心の水面を荒立てず、悲しみや  
不安を心の中にしまい込む靖子さん。  
会社再建を素直に受け入れられなかつ  
た胸の内を涙ながらに話してくれた。  
「母さんの人生、波乱万丈だね」堯  
さんの何気ないひと言に「そうだね」堯  
さんと苦笑する姿に、わが子へのかけがえ  
のない愛情と苦境に立ち向かう母の強  
さを感じた。

## みんなに恩返しをしたい

迎えた7月1日、名取店がリニューアルオープンした。3カ月余りの苦勞  
が報われた瞬間だ。店内には「赤い福  
興Tシャツ」に身をまとった従業員の  
笑顔が並んだ。工房には90歳になる会

長・圭司さんの元気な姿があつた。  
手造りからの再スタートには熟練の  
技が必要と、家族総動員で臨む。朝  
5時に起きても2千枚を焼くのがや  
つと。店に訪れるお客さんの対応で  
精一杯と、嬉しい悲鳴をあげている。  
私たちを応援してくれる人、会社  
を支えてくれる従業員、そのありが  
たみをあらためて肌で感じた。「み  
んなには苦勞をかけるが前へ進むし  
かない。一日も早く軌道に乗せて新  
工場の建設につなげたい」。その思  
いは、ささ圭のかまぼこを親しみ育  
ててくれたみんなに恩返しをしたい  
という気持ちが原点になっている。  
ようやく戻った震災前の日常。ま  
だ、まち全体の青写真は見えていな  
いが、確かに笹かまぼこ復活ののろ  
しは上がった。震災直後、避難所に  
提供した2万枚のかまぼこは、人々  
の命をつないだ。次は希望をつなぐ。  
多くの人が待ち望んだ「ささ圭」の  
再起は、閑上復興への確かな道標と  
なっている。



ご家族の皆さん。前列左から、会長・圭司さん、妻・あつさん、後列左から長男・堯さん、社長・圭亮さん、妻・靖子さん。

# 絆

佐々木さんの  
知人・友人からの  
応援メッセージ

佐々木さんとお会いしたのは、震災のちょうど1カ月前。名取市閉上にあつた「ささ圭」さんの本店工場での取材でした。

季節はちょうど、バレンタインシーズン。仙台市内がバレンタイン商戦真っ只中、お隣名取市では老舗の「笹かまぼこ屋」さんが、ちよつとかわつた商品を開発している、というニュースでした。ささ圭さんの造る、手のひらサイズほどのピンクや白のハートのかまぼこ。すべて手作業で造られ、メッセージもデコレーションしてくれるというものです。急な取材依頼にもかかわらず、本当に丁寧に対応していただきました。そんな日から1カ月。あの震災がやってきました。県内の沿岸部を襲つ



## 仙台放送

アナウンサー

### 梅島三環子 さん

しかし、「ささ圭」さんの姿に勇気付けられる方はたくさんいます。どうか、新工場建設までみなさまお体を大切に、早く元の姿に戻れることを祈っております。

た大津波。「ささ圭」さんのことが頭をよぎりました。潮風を感じるほど、海に近い「ささ圭」さんの工場です。会社に連絡をしても、全くの音信不通で本当に心配していました。しかし、ほどなくして、会社のホームページでブログが更新されたので

「ささ圭さんは、頑張っている。」私は、どうしても県内の方々に「ささ圭」さんの今と、力強く前を向いて歩む姿を伝えたいと思いました。電話が駄目なら…と、名刺に書いてあつたアドレスにメールしたのが幸いし、ご連絡をいただくことができました。それから、1カ月前に伺つた工場を案内していただきました。その光景は言葉にならないほど衝撃的なものでしたが、あの場所で、再起を誓つた佐々木さんの言葉は力強く、閉上地区の方々だけでなく多くの被災された方々に勇気を与えるものであつたと思います。

復旧・復興と言葉で言えば簡単ですが、それには大変な努力と苦労があることだと思います。

## コープきんぎ事業連合

理事会室統括 杉山 乙彦 さん

6月上旬、大阪で開催した私どもの総会に、まだ臨時便しか飛ばない仙台空港から佐々木ご夫妻をお招きし、大震災の体験とささ圭再建に向けた熱い決意をお聞かせいただくとともに、役員が作った寄せ書きと組合員から寄せられた数多くのメッセージカードをお渡ししました。

というのも、14年前、滋賀県の生協から始まつたささ圭さんの笹かまぼこが、組合員の「コレ、美味しい！」との口コミで徐々に広がり、今では近畿全域の生協が取り扱う人気商品となり、年間1億円以上の販売額になっているのです。

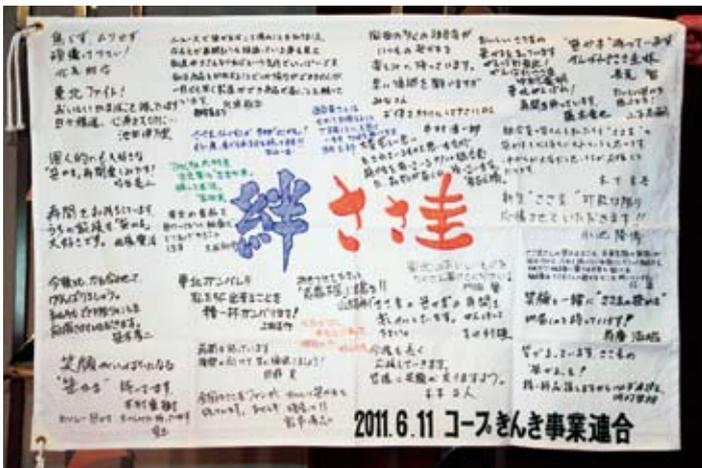
折しも、震災の3月11日は、プレーン、しそ、チーズに次ぐ4番目の新商品として、私たちと一緒に開発してきた「厚焼笹かま・生姜」が焼きあがり、大阪に向け初めて出荷していただく日でした。

注文を受けていた7千人近くの組合員に「津波でお届け出来なくなりまして」とお伝えしたところ、「何年かかってもいいから届けて!」「絶対に再開してください。応援しています!」等のお声が数多く寄せられたのです。近畿でなじみの薄い笹かまぼこがこ

れだけの人気商品に育つたのは、社長を支え美味しさと安全・安心にこだわり続けられた、取締役佐々木靖子さんの人柄!というのが率直な感想なのです。

この6月に退任した私どもの理事長が、靖子さんと同じ徳島出身で同じ京都の学校だったというのも何かの縁と感じています。

一日も早く再建され、美味しい笹かまぼこをもう一度届けてください。待っています。



佐々木さんに手渡された寄せ書き

# 絆

佐々木さんの  
知人・友人からの  
応援メッセージ

新野中学校同窓生

小浜 浩子 さん（那賀川町）

暑さ厳しき折、お元気で頑張って  
いらっしやることと思います。

震災以降、何回か電話をしました  
が、つながらず心配していた時、友人  
が持つてきてくれた新聞の切り抜き  
を見て、ご家族全員の無事を知りま  
した。ほっとして胸をなでおろしま  
した。

でも、大切な工場や店、自宅を失  
った悲しみは想像を絶します。宮城  
へ嫁いで30年余り、「ささ圭」のお  
かみとして一生懸命頑張ってきたら  
ただけに、今回の惨事はさぞ、おつ  
らかったことと思います。

毎年、靖子さんから贈っていただ  
いた笹かまぼこは本当においしく、  
みちのくの海の香とともにいただい  
ておりました。「また届けてほしい」  
そう思う人々が、全国にたくさんお  
られるのではないのでしょうか。会社  
再建の道のりは決して簡単なもので  
はないと思いますが、何とか乗り越  
えてほしい…。今はそう願うばかり  
です。



佐々木さんを励まそうと集まった新野中学校同窓生  
「新中21辰巳会」の皆さん。

平成7年の阪神大震災時には、被  
災地に笹かまぼこを贈られたとお聞  
きしています。今度は、靖子さんが  
応援してもらう番ですね。微力なが  
ら、私たち同窓生も応援させていた  
だきたいと思えます。本格的な稼働  
にはもう少し時間がかかりそうです  
が、無理をせず、くれぐれもお体を  
大切にしてください。

私たちは来年、還暦（数え年）を  
迎えます。新野中学校を卒業して40  
年余りになりますが、今も色あせる  
ことのない若き日の思い出に花を  
咲かせようと、2月には同窓会を予  
定しています。靖子さんにとっては  
大変な時期だとは思いますが、たま  
には息抜きも必要ではないでしょ  
うか。旧友たちは、靖子さんの笑顔の  
帰郷を心からお待ちしております。

新野木材株式会社代表取締役社長

新野 哲朗 さん（新野町）

あの日、名取川河口周辺が津波にの  
み込まれていく映像を見た時、ふと、  
ある人のことが頭をよぎりました。

10年前、幕張メッセで行われた「法  
人会全国青年の集い千葉大会」。大会  
初日、全国から460人ほどが参加す  
る部長サミット開会前に、各アプ  
ルでは名刺交換が始まっていた。そ  
の人は、仙台から参加していた青年  
部会長の佐々木さん。私の名刺を見  
て「えっ！私の家内の里は徳島県阿南市  
です。それも新野町です。」奥様は、  
幼稚園から高校まで同じ学校で、一  
上の先輩でした。こんな偶然があるの  
かと、不思議な縁を感じたものです。

その後、奥様の里帰りの折に、一緒  
に弊社にもお立ち寄りいただきました。  
奥様の妹さんには、弊社の従業員とし  
てお世話になっております。ご家族の  
無事は、震災から何日か経った後に妹  
さんからお聞きしておりました。

ある日、インターネットニュースで  
「笹かまを絶や  
すな」という記  
事を発見。まさ  
にその人、佐々  
木さんの写真が  
載っていたので  
す。さっそく記  
事をプリントし、



被災した本社工場の完成予想図  
を手取る佐々木社長さん。

奥様の実家（新野町）に届けました。  
その時、一時的に避難していた息子さ  
んにお会いし、明日、宮城に帰るとの  
ことでしたので、私からお見舞いのメ  
ッセージを預かってもらいました。

その後、佐々木社長様から連絡をい  
ただきましたが、その時は、深い話は  
できませんでしたが、「とにかく頑張っ  
てほしい」との思いから、このことを  
多くの人に知ってもらいたいと、会社  
のブログで紹介したり奥様の同窓生に  
連絡したりしました。

5月中旬、仕事で東北を訪れる機会  
があり、わずかでしたが仙台方面に寄  
ることができました。生々しく残る震  
災の爪痕に絶句しましたが、再開した  
仙台空港から「がんばろう日本」と描  
かれた飛行機が飛び立つのを見て、復  
興を願う思いを強くしたばかりではな  
く、逆に元気をもらった気がしていま  
す。

今、東北の地に全国、いや世界中か  
ら多くの支援の手が差しのべられてい  
ます。多くの人々に愛されてきた「さ  
さ圭」ブランドの一日も早い再興を願  
ってやみません。私も、しいたけブラ  
ンドの確立に日々邁進しています。未  
来を創造する会社の経営者として、共  
に頑張りましょう。



ゆるやかな空に手紙を書いて

残暑お見舞い申し上げます。

ふるさと阿南市の皆様には、お健やかにお過ごしでいらつしやいますでしょうか。

3月11日の東日本大震災による未曾有の大津波では、阿南市の多くの方々にも大変ご心配をいただき、篤くお礼申し上げます。あの日、私たちは一瞬のうちに何もかも全てを失ってしまいました。あまりのことに、茫然とする日々…。

前途を思う余裕すらなく、自分を見失いかけることもありました。

しかし家族5人、奇跡的に全員無事に生き残りました。今は生かされたことに感謝しつつ、この命、いつかはきっと人の為になることができるようにと、復興に向けて少しずつ歩みを進めています。

阿南市から、みちのく宮城県名取市に嫁いではや30数年の月日が流れました。

取材にいらした山田さんから、「ふるさと新野で、どこが一番思い出されますか？」と聞かれ：「やっぱり平等っさんやねえ…」

小学校の頃、凶工の時間、写生によく訪れた「平等っさん」。たんぽぽや菜の花、れんげそうが可愛い花を咲かせる頃、平等寺から薬王寺に向かうお遍路さんたちの白装束姿、心に深く刻まれた光景です。

旧のお節句には、母の手造りのお弁当を「遊山箱」に美しく詰めてもらい、姉や友達とゴザをもって近くの筍山に「ゆっさんに行こー」と、登ったものでした。ちなみに、私は極度の高所恐怖症、毎度姉達を散々手こずらせたようで、今でも語り草になっているほどです。

食べ物では、何といても「すだち」。すだちの清冽な香気は、徳島県人にとっては柚子やレモン、かぼすなどには断じて替えがたいものがありますものね。大阪の商家ではその昔、「氏より育ち」「ゆずよりすだち」といって愛でたものだと聞いています。また、新野・福井産の筍の柔らかさと深い味わいは、こちら宮城の筍とは比べるべくもないくらい。土壌や気候のせいでしょうか、徳島産の野の物、山の物、海の物には、まるやかで味わい深いものが多いと思いますし、おすそ分けをする友人からも、異口同音にそのように申します。そんな時、いつも鼻高々の私なのです。

阿南市新野町で、ごくごく普通に育った私ですが、阿南の暖かい風土や気候、四季折々の変化に満ちた風景、そして穏やかな人々の暮らしは、今思うと自分の人間形成にとっても大きな影響を与えてくれたと感じます。新野で、阿南で、徳島での「育ち」があったからこそ…そして何があってもいつも自分を受け入れてくれるふるさと阿南があるからこそ、今の自分がある…と。阿南市は、私にとって、いつまでたってもきつと「一番ほつとできるところ」…そんな気がします。

この度、たくさんご心配をいただいた地元新野町の皆様、そして富西の同窓生の皆様には、一生かかってもお返ししきれないほどのご厚情をいただきました。このようなことになって初めて、自分ひとりで生きてきたのではない、こんなにも多くの方々温かく見守られ、支えられて生きてきたのだということに気づかされました。

皆様にも勇気と元気をたくさんいただきました。本当にありがとうございます。今も一日も早く美味しい笹かまぼこをお届けできますよう、本社工場再建に向けて精一杯励みたいと思います。

まだまだ残暑きびしき折、皆様どうかお大事になさってくださいませ。

最後になりましたが、大津波以来、ずっと励ましのお電話をくださった岩浅市長様をはじめ、このような素晴らしい機会をつくっていただきました阿南市の皆様、この場をお借りして心より感謝申し上げます。被災地ここ名取の空は、遠く阿南の青い空に繋がっていると信じて…

かしこ

8月吉日

佐々木 靖子

#### プロフィール

佐々木 靖子 (ささき やすこ)

南谷家の次女として、昭和27年11月12日に生まれる。現在58歳。

新野小・中学校、富岡西高等学校を経て、昭和51年に立命館大学文学部を卒業。昭和52年、大学の能楽部の先輩であった佐々木圭亮に嫁ぐ。その後、蒲鉾屋の若おかみとして仕事に専心。現在、名取市高館熊野堂に夫・義父母と暮す。(長男：横浜在住、大学2年)

【略歴】 関上小・関上中学校PTA会長、宮城県PTA連合会副会長を歴任。現在は、名取市教育委員を務める。

【尊敬する人】 両親 【好きな言葉】 ご縁

【趣味】 能楽(謡・仕舞・小鼓)

【株式会社ささき】

昭和51年有限会社佐々木商店設立/取締役(個人創業は昭和41年)

※ささき圭ホームページ(<http://sasakei.co.jp>)

「かまぼこや おかみ圭子のブログ」を更新中!